「経験者」が思い後押し

声なきSOS －4－

ひきこもり 支援の行方

サポーター

地域住民巻き込み幅広く

「ブラッシングは優しく。俺みたいに力任せでやっちゃ駄目ですよ」。7月上旬、新潟市西蒲区の事業所で革靴を磨きながら同市の専門学校生ケイタさん(25)＝仮名＝は、周囲の若者におどけて見せた。

市西蒲区社会福祉協議会が本年度、ひきこもり支援の一環として始めた靴磨き。月1回、区内の事業所から一足300円で預かる。ひきこもりや生きづらさを抱えた人たちが集い、作業を通じて自らの「役割」を体感。社会参加を促そうというものだ。

この日、ボランティアの支援員として初参加したケイタさんは東京都出身。小学2年から不登校だった。成績はよかったが「教師からプレッシャーを感じていた」。テストでいい点を取っても認めてもらえず、信頼関係を築けなかった。「学校のことを頭から切り離したい」と通学をやめた。

中学卒業後は通信制高校へ進んだ。親とのトラブルも増え「このままじゃいけない」と不安を抱えていた時、あるフリースペースに参加した。支援員は昆虫が大好きなケイタさんの個性を認め、親身になって生き方の相談に乗ってくれた。

「お世話になった人に直接は恩返しできないけど、別の形でできたら」。ケイタさんは漠然とそんな思いを描くようになった。今春、ネーチャーガイドを目指し、本県に進学。知り合いの紹介で西蒲区社協の活動に参加するようになった。

■　■

ひきこもり支援では、ケイタさんのような経験者と、同じ立場にある当事者同士が支え合う「ピアサポート」に注目が集まる。西蒲区社協もその実践に動きだし、今秋から「サポーター」養成事業を始める。

もともと、当事者の居場所づくりや家庭訪問などに力を入れていた。その中で「普通に話すのなら、僕じゃない方がいいのかなと思うことがあった」と同社協コミュニティソーシャルワーカーの渡辺卓也さん。当事者の親族でも、医療や福祉など専門職でもない、第三者との何げない会話に力があると考えた。

ケイタさんはサポーター「候補」として名乗りを上げている。「ぐいぐい引っ張ることは好きではないので、外に出たい、働きたいという思いを後押ししたい」と意気込む。

■　■

同社協が募集する「サポーター」対象は元当事者にとどまらない。五十嵐杉之事務局長は「生きづらさを理解する人だったら、定年退職したシニアでもいい」と語る。

「8050問題」に代表されるように、20、30年とひきこもる中高年に就労のゴールを求めるのは現実的ではない。興味のある将棋や野球の話題で、心を少しでも通わせることができれば、地域からの孤立を防ぐことができる。五十嵐事務局長は「シニアが生きがいを発揮できれば」と理想を描く。

ひきこもりが各家庭内で潜在化している今、福祉、医療だけに頼らない、地域住民を含めた幅広いサポート態勢が求められる。

＝おわり＝

（この連載は報道部・中村茂雄、本間美季子が担当しました）

西蒲社協の職員とやり取りしながら靴磨きをするケイタさん（手前）。作業中のちょっとした会話が当事者を勇気づける＝新潟市西蒲区

県内の主な相談窓口

県ひきこもり地域支援センター	025(284)1001 平日午前8時半～午後5時 （新潟市以外の在住の方）
新潟市ひきこもり相談支援センター	025(278)8585 火～土曜（祝日除く） 午前9時～午後6時 （新潟市在住の方）
柏崎市ひきこもり支援センター	0257(41)6005 平日午前8時半～午後5時15分（柏崎市在住の方）
NPO法人KHJにいがた秋桜の会※	090(8873)4453
KHJ長岡フェニックスの会※	0258(38)5001 ながおか心のクリニック内 （日、木曜除く）

※は全国組織の家族会の支部。居場所も開設

このほか、各地域振興局の健康福祉担当でも受け付ける